金沢反戦市民

金沢南郵便局
私書箱25号
金沢反戦市民社
1972
3月30日
改題 17号 再版
通巻 24号

外堀はうずめられた
それどころかこれらの

金沢反戦市民社

1

経済的な利害関係をネ一義におく内灘町当局は、利权だけをしっかりとにぎりしめて、表面上は県公害審に、事の結着をまかせた。いやそのようによそおってきた。北電との収調印、県当局との緊密な共同作戦、北電の売収工作と町のとりつぎ屋の半公然の暗躍など、事の実質は、北電、県、内灘町三者で決められてきたのだ。

いっぽう阻止連合ほか地元四団体県評、社共に主導された金沢火力連絡協議会は、PPM論争にあけくれてもっぱら〝科学性〟によりかかってしまった。そのことによって衛程〝科学性〟の絶元論、公害審議会のワナにかけられた。

公害審とは何か。一般的に審議会諮問委員会とは何か。ということに目をつぶっていることに問題があるのだ。

民主々義を人々のくらしの都合のために運用するという本来からはなれて単に多数の暴力をかくす「しくみ」になってしまった「民主ファシズム」の現状をみようとしない。支配者はその上にのっかって民主的形式の中に多数決の論理だけを確保する技術をうちたてた。あらゆる審議会諮問委員会はそのための道具である。任命制の委員会であって公選制の委員会ではない。公益委員という名で官僚の古手やエセ学者がおくりこまれ始めから国、企業、特定の利益団体が多数派を組織している。このたびの公害審をいちどでものぞいた人はよくわかったように、はじめから終りまで北電と県当局の共同原案によって押しとおされてきた。石川県OO課長のかたがきをもつ能更によってあくまで行政ペースでおしきられた。学者先生のPPM論議は審議会の政治的行政的性格をかくすいろどりにすぎなかった。

北電の火電設置ももとはといえば中央の「電調審」という審議会でまっさきに承認されている。審議会にはじまり審議会でおわる。このような制度、委員会多数派による圧殺の論理と手だてそのものをうちくだくために、少数者の自己解放の論理、手だてとしての民主々義が開発され運用されねばならない。

2

私達は、昨年、「一億円請報を拒てまつ内灘は徹突だこして高いびき」「高せ高せ」というけれど高なりや毒のむOO節」という狂歌風のスローガンをかかげて出発した。

公害審の最終段階には「インチキ科学の名によって火電を招くその罪は末代までも消えはせぬ」「走人子供をまつ先に争い者いじめの公害差別あなたは責任とれるのか」という反戦短歌の会のカッ作？が各委員のまわりや街中に貼りだされた。いずれも問題の真実くまでみとどけていた。小田実流にいえば委員会という抽象物がある訳ではなく一人一人の委員という名の人間がいて彼等ひとりひとりが事をそのようにはこんだのだ。〝個人に対する中傷は許せない〟などと、ワメイテイル委員がいたが、委員ひとりひとりが責任をとらなくて、誰が責任をとるのか。委員会が責任をとるのか？委員会とは建物の名前か？高速も休み休みいうがよい。いつも、この手でダマされてきた民衆の身になれば、現に吉岡金市委員（金沢経済大学長）は責任をとって辞任したではないか。（ついでに言えば、金経大の学生諸君がこれをとらえて吉岡氏をもりたて審議会の暴挙にたいして抗議デモなり何なりの行動を何故しないのか。ここから学生の活動の自由が問かれていくかも知れないのに。何故ボヤッとしているのだろう）

3

この間の経過はすでにネーラウンドが終り、ネニ局面に移りそれにともなってあたらしく戦術がねられねばならないことを明らかにしている。阻止連合や社会党共産党の路線が破綻したことは明らかではあるけれども、こうかといって火電阻止の運動は学生運動の延長線上にあるわけではない。阻止だ！実力だ！というだけでは何事もおこりはしないし変りもしない。その時々に必要な具体的な手だてを考えださねばならない。それが運動のはじまりである。私のみるところでは内灘町民大会は、直接に被害をうける住民が、町当局や公害審という制度のギマン性をはぎとり、のりこえて直接北電にぶつかってゆく手だてとして、確かな歩みだしになるものだった。しかし、実力阻止のかけ声と阻止連合の代行主義にかくれて、町民大会の組織化はできなかった。現段階ではいささか時期おくれである。というより60万都市構想のラッパを吹きならして公害に反対する住民の声を圧殺することに全力をあげている北電・地元新聞によって民衆の心は委縮している現状ではほとんど不可能になった。

しかし私達は少数者の自己解放をめざす限りどんな事態になっても必要最少限の抵抗――P6下段へ――

市町合併とコミュニティ

志保 兼一

市町合併とは自治省が決めたモデル地区の名称で全国百十数ヶ所に選定されたものである。県・市（地方自治体）のもとで行政の効率化と財政と福祉を強化するという目的で実施されるものである。この内容は公民館（新築又は増設）、体育館、保育所の強化、サークル活動の活性化などが盛り込まれている。

これでは何故市町合併を最優先として最初に選ばれたのか、真にこのコミュニティの意味するものは一体何なのか、最初の頃に強調を与えるには後者の頃におおよその強調を与えねばならない。田沢防、この他の軍事政策に強大な金額を与え続ける政府＝自民党が福祉政策の中では大きいともいえる金額を予算として計上するという理由である。これはコミュニティ政策が田沢防やこの他の軍事政策、ファシズム政策と強固に結びついているからである。国民の総意のもとにより、始めて軍政は最強の力を発揮する。そして今国民の総意をたやすくつくり上げるために、より強固にするために住民の再編成を実施しようとしているのである。

ファシズムという言葉を語ることにより全てが解決されたかのように思い、聞いている方もわかったかのような気がしたり、さもわかった様をする。帝国主義、階級という言葉で全てが解決されると思っているようだ。この頃にファシズムの嵐の目は静かに暗雲が張りめぐらされていく。

市町合併とコミュニティは

市町合併とコミュニティは自治省が決めたモデル地区の名称で全国百十数ヶ所に選定されたものである。県・市（地方自治体）のもとで行政の効率化と財政と福祉を強化するという目的で実施されるものである。この内容は公民館（新築又は増設）、体育館、保育所の強化、サークル活動の活性化などが盛り込まれている。

これでは何故市町合併を最優先として最初に選ばれたのか、真にこのコミュニティの意味するものは一体何なのか、最初の頃に強調を与えるには後者の頃におおよその強調を与えねばならない。田沢防、この他の軍事政策に強大な金額を与え続ける政府＝自民党が福祉政策の中では大きいともいえる金額を予算として計上するという理由である。これはコミュニティ政策が田沢防やこの他の軍事政策、ファシズム政策と強固に結びついているからである。国民の総意のもとにより、始めて軍政は最強の力を発揮する。そして今国民の総意をたやすくつくり上げるために、より強固にするために住民の再編成を実施しようとしているのである。

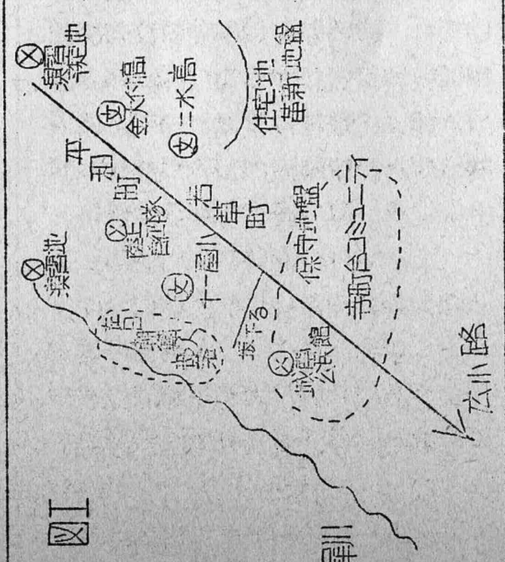


図1は後方に自衛隊基地を置き、この側の浅野川、犀川の間を下ると社日朝鮮人の人々の部落があり、住宅地として形成され、商業人口と住宅人口がキリ合っているという実態を示しているのである。

この様な住民の再編成、組織化、管理化は、まさに自衛隊の強化、拡大、社日朝鮮人の差別政策強化と迫っている。これらは現在として「民主々義」の幻想をつくり人々を抑圧する。この住民管理、住民の相互監視体制は、戦前、戦中の隣り組を想起させるに充分であり、関東大震災の在日朝鮮人大量虐殺を再び用意させるものであることはまちがいないのではないだろうか。

（つづく）

市町合併

志保 兼一

我々の運動とは無関係に市町合併が行なわれようとしている。これは個人原理が我々の運動と対抗しているのだ。※個人原理とは個人原理一個人原理であるこれは個人原理が我々の運動と対抗しているのだ。※個人原理とは個人原理であるこれは個人原理が我々の運動と対抗しているのだ。

警察国家の布石

by ELKDEEMRNDUS

「過激派・暴力学生」という言葉が新聞にあらわれてからすでに久しいが、マス・コミが国家权力の広報机関のようにして繰り広げた「過激派・暴力学生キャンペーン」の中でおこなわれてきたことは、治安に名をかりた警察の武装の公然化とそのエスカレートであり、「民主々義」をふりかざしての民衆への沈黙の強制である。

こうした国家权力の暴力化とそれに積極的に加担し擁護するマス・コミが一体となった警察政治は、「あさま山荘の十日間」を通じて威風堂々とその姿をみせたのである。

「説得」は誰に向けて

警察はまず、山荘へと追いつめた連合赤軍に対して「説得」の期間をもうけた。しかし、この説得は役らにではなく、むしろ我々民衆へ向けられたものではなかったのか。かつてA「シージャックV」の時のライフル部隊の登場がかなりの批判を浴びたことの教訓から、その二の舞を踏むまいとし、そしてA「あさま山荘V」を民衆を国家の力の下へ一気に押し込めるための絶効の机会として最大限に利用すべく、それこそ人質の安否などそっちのけで慎重に「説得」は続けられた。それは、我々一人一人に対して「おまえは、連合赤軍のような暴徒を支持してこの社会の外へ放り出されてもいいのか。それともものの言わぬ愚民となっておとなしく警察国家のいいなりになるのか」というような強迫的問いつめであり、単に第三者（一国民）としてどう思うのかなどというものではなく、「いのち」と「くらし」を根底からゆさぶり脅やかすものとしての「説得」である。

この权力の意志をみごとなまでにくみとったマス・コミは、連日「人質の安否を！」と、まるで全民衆の願いを代表しているかの如くに叫び続けることによって、この「暴徒か愚民か」の問いつめを更に効果あるものとしたのだ。ところが、この連呼がデマに満ちていて、心底は「知る权利」を独占収奪されており、官僚国家のタテ割社会の中でいやおうなくバラバラにされている民衆へ、いたずらに過激派集団という妄想をうえつけ、国家の意志を押しつけるためであったことは、皮肉にも「救出」直後の倉田栄子さんの言葉が明らかにしたのだ。彼女への真の問答はいったい誰か。

警察は「人質の救出」を錦の御旗としてかかげることによって、民衆の味方を装い、過剰としか言いようのない重装備とその行使を有無を言わさず正当化し「公の暴力」への不問を民衆へ強要している。この警察の武装は、マス・コミ総動員の世界にも例をみない長期間連続中継によって、事件の本質をすり替えた一大活劇ショーとして映像化されると同時に、「お国にたてつくものは、皆こうなるのだ」というみせしめとして、見せられる側にたたされた我々ののど元へ兇器として迫って来るのだ。

法の無法

法治の名によって、民衆の「いのち」と「くらし」を守る权利を一方的に独占している国家は、こうしてあらゆることを最大限に利用し、「首をつきつけての問いつめの中で、一切の社判を圧殺し、「もの言える愚民」へと我々を追い込もうとしている。これこそ、ファシズム以外何ものであろうか。

かつて、正義を法としたはずの人々の知恵は、いつのまにか、いや、戦後の「民主々義と平和」を高らかに歌いあげるその中で、「权力は法であり正義である」とすりかえられ無策のための無法が公然となされてゆく。今や「法」の無法が白昼を闊歩する時が来たのだ。

さて わたしはそしてあなたは

今こそ、我々の「自由」を希求することの意味が吟味されている。「いのち」と「くらし」の全てが力ッコつきの自由の中で揺れ動いている。もはや、沈黙は我々に何ももたらしはしない。いやそれどころか、沈黙し続けることそのものが究極において、权力の無法をほしいままにし、我々を再びの死の淵へと追いたててゆくのだ。

このことは、すでに、連合赤軍のような权は極悪人であり全人間の敵だという無言の圧力となって、彼の父親を自殺へと追いたてたのだし、ハリソン事件Vの遺体発掘作業の中で、警察が一度埋め、記者団に発掘作業を見学させるために利用するというようなことまで公然とさせている。しかも、マス・コミはこのことを警察側の余裕のあらわれだと評価するありさまなのだ。

ファシズムは、「日本帝国主義は復活したかどうか」などという論議をとびこえて我々の「いのち」と「くらし」の中へ着実に入りこんでいる。今、我々はいつまで沈黙を続けるのか。それともあなたは、目の前へ一銭五厘の赤紙をつきつけられるまで、我々は自由であり、平和なのだと信ずるのか。

会計報告

	収入	支出
カンパ	21250	
講読料	1600	
紙売上	450	
切手・テープ・切手		3140
団結小屋カンパ		2000
のり・はさみ・原紙		3850
号外印刷代		15500
2月28日～3月25日	23250	24490

連合赤軍をおいつめたもの

五代 明

最近金沢の町々にこんなパンフレットが出廻った。これは全国で最も理想的(?)なシステムといわれている金沢の町内会の回覧板を通じて、半強制的に各戸ごとにバラまかれたものだ。このパンフ「手制爆弾、火炎ビンについてのお願い」という見出しになっている。が、その裏には権力のいやらしい、どすぐろい陰謀、それとファッズムの時刻表というものが隠されていることに、賢明なる読者諸氏はきづかれたであろう。

爆弾や火炎ビンへの恐怖・不安をかきたてておいて「あやしい人をみかけたらすぐ110番へ――アパートなどでみなれない若い者が、夜遅くまでしきりに出入りしている」とある。これはまさしくぼくたちのことなんだ。それを裏付けるように、このパンフが出廻った頃金沢市内のあらゆる学生の下宿・アパートなどへ警官の戸別訪問が行われたのだ。どうかにもれずぼくの下宿にもやってきた。「何人下宿しているか、どこの学生か、学生運動をしている様子か、夜になってよく出歩くか、他の学生がよく訪問して夜遅くまで話しこんでいることがあるか……ぬ」と、まあおばさんから聞いたところではこんなところだ。ぼくはお酒が好きで、門限過ぎてからでもこっそり夜の巷に出歩くし(これはおばさんも御存じの事)、訪問客も結構あって夜遅くまでダベっているので、これはまさしくぼくの事だと思わざるを得なくなる。警察ではぼくらを潜在的犯罪者といいたいらしい。

ぼくの紹介で(これでもぼくはある程度下宿では信頼されているのだ。)空家を借りていた友人達の事ではもっと頭に来た。彼らについては顔見知りでもあり、正式には名前と勤務先ぐらいしかおばさんには知らせてなかったが、それで十分だったのだ。ところがかの警官いわく「大家たるもの若い借家人の本籍や両親の住所勤務先の住所ぐらいは知っていなくてはならない」。その後しばらくして再び別の警官が御訪問「どこの借家人の本籍や両親の住所など聞きに来ました。エッまだ聞いてないんですか、こまりますねえ」。その後さらにいれかわりたちかわり御訪問・その間に彼らはその友人達の所へも直接訪問しているのに、そんなことは少しもおばさんには知らせず、「両親の住所は?会社は?……」おまけに「彼らにはこのことはないしょにしておいてください」

いったいぜんたい警察はどんな権利でもって大家とたった子の間に入りこんで来るのだろう。基本的人権の侵害ではないのか。さささやかな庶民の信頼関係がどうも警察には気にくわないらしい。

＊　＊　＊

ここでぼくはふとローラー作戦というのを思い出した。京浜安保や赤軍の銃砲強奪や銀行強盗のあった頃から、東京都内では学生のいそうなアパートや下宿がしらみつぶしに調べられ、同様に同じパンフがばらまかれたのだ。そして町の銭湯や町内の掲示板には過激派学生の手配写真がはりめぐらされ、古くなったらまた新しくはられ、さらに新しい人々が手配写真に加わった。彼らには○○容疑という口実がつけられていたが、○○容疑であろうとXX罪であろうともうどっちでもいいくらいの大キャンペーンがはられた。そして一方では、法と秩序を守るという御題目を声高らかにとなえ、爆弾は無差別に人を殺し、火炎ビンはあなたの家を焼きはらう、と不安と恐怖をかきたてていった。こうしてローラー作戦は警察だけではなく、町内会自警団・愚民と化した市民をもまきこんで、世を平らかにおしつぶしていった。そこではこの殺伐とした社会でかすかに保たれている大家とたな子・アパートの同居人同志の無言の信頼関係はじゃまであったろう。さらには逆に「ダイヤル110番強化運動町内」というような形で戦前の監視・密告機関としての隣組制度が新たなる連帯感の上に築かれていった。

最近のマスコミは、連合赤軍の事件に関連して「追いつめられた少数者達の異常心理」などともっともらしく吹聴している。追いつめようと画策したのは警察である。が、実際に心理的に追いつめたのは彼らマスコミとそのイメージ操作にのせられた愚民と化した市民であったろう。そして、感情をおさえきれない理性を失ったマスコミの報道が作り出した巷のムードは、赤軍についてちょっとでも弁護めいたことを言えば逆に殺されかねないくらいになっている。「あんなやつら国民の前にひきずりだして、もっともっと苦しめて殺してやりたい」という主婦の声が、善良な市民の怒りとして、テレビを通じて全国へばらまかれているのだ。言いおわったあとのあのはればれとした主婦の顔。

＊　＊　＊

ローラー作戦はまだまだ初期の段階なのだ。今度はだれを追いつめおしつぶそうとしているかは読者の御推察どおりである。今後我々は注意深く一つ一つの権力の画策を見破り暴露していくと同時に、再び同じ歴史をくり返さぬよう何をなすべきか考えねばならない。

去と秩序を守るというタテマエと、権力にごうよく書き換えられたヒューマニズムは、極東裁判やニュールンベルグ裁判の判決を、彼らにだけ適用し、彼らを抹殺するだろう。かって中国や朝鮮で、そして現在東南アジアで、多くの人々を殺し、殺しつづける者達やそれに協力する者達にはいっさい適用されないのである。

〈三月廿五日〉

＊なおファッズムに関する参考図書として次のものをおすすめしたい。

・思想の化学(一九七二年二月号〈思想の化学社にバックナンバー有〉)

・週間アンポ No5(持っている人に貸してもらう)

・ファッズムの大衆心理(W・ライヒ著 せりか書房)

〈五代 明〉

ラクガキぺーしん

……ELDER・KEMNPUS

非合法が秩序破壊なら
合法は民意の正殺であり強奪である

町を歩いて気付いたことないか。そう、電柱にステッカーがあんまり貼られてない。（23日現在、金沢火力阻止！金沢虫けら社の一枚だけ）これは何故か？誰れも貼らないのでなく、貼れなくなったのだ。片町、香林坊周辺の電柱には水をはじく油性の塗料がベッチョリと塗られている。（大阪・京都あたりではイボ付きの電柱が出現しているそうな。）

電柱にステッカーを貼る行為は違法である。ステッカー等を掲示するには、市土木課の許可が必要であり、それも多くの制約があって、電柱には貼れない。

しかし、考えても見よ！情報手段が権力＝マスコミによって一方的に占有されていることを想起せよ！何の組織もない市民運動のように、一人ひとりの人間が自分のいいたい事を言おうとする時、どんな手段が残されているか。例えばビラまきがあり、例えばデモがある。そして、電柱は、金も組織もない人間たちの伝言板として、そして社会の表面に浮かび上がらない様々の運動の交流の場として、重要な役割を果してきたのではなかったか。

数年前から、選挙等のポスターはほとんど、ベニヤ板をハリガネで止めるようになった。確かに、この方法は選挙が終ればすぐにはずせて便利からしれない。（ネー、二枚舌のオッサンやオバサンの顔がいつまでも街頭にブラさがっているのは、市民の精神衛生上きわめてわるい。）

しかし、これは金がかかるのです。ベニヤ板も安くはないし、それを何十枚と運ぶのは大変なことです。要するに金がなきゃできないし、一人ではできないことなのだ。

こうして、電柱にはドス黒い塗料が塗られることによって、小さな虫達は抹殺されていき、ぼくたちの耳には、体制に染められたコトバばかりが、マスコミを通してヤタラに大きく聞こえてくるのではないか。

電柱を奪われることによって、市民と市民運動とのつながりは一つ失なわれた。そして、統制された、肉声の暖かみを持たないコトバが、町中にハンランしてゆく。そのうち、ビラまきもできなくなり、デモもできなくなるだろう。これが、今の民主主義に支えられた人権表現の自由の実体なのだ。形のない、言葉だけの、そして権力者、金持のためだけのへ表現の自由〉なのだ。

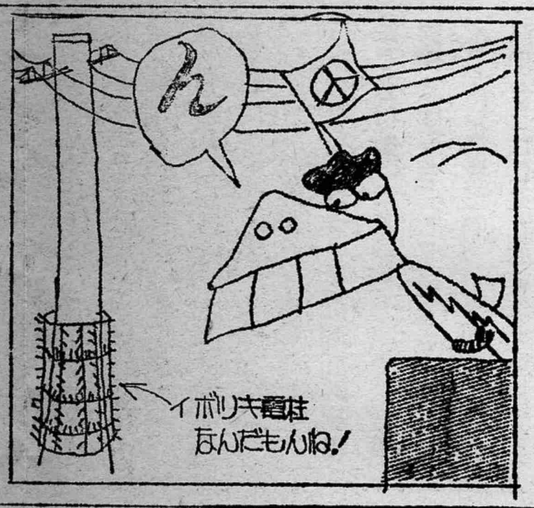
ステッカーの貼られてない電柱が立ち並ぶ町は美しいだろうか。それは人の声がしない死の街ではないだろうか。そして、金にモノをいわせに大会社のドギツイ広告塔で街はうづまってゆく。

人間の生の声であふれた街を取り戻そう！コトバの広場としての電柱を我らの手に取り戻そう！

〈今、ぼくにもできる事〉

小さい頃、誰もがやったことのある、あのラクガキの楽しさを想い出して欲しい。ラクガキは楽しい。場所はどこでもある、電話ボックスでも、公衆（高臭）便所でも。マジックー本あれば誰でも書ける。みんなのラクガキで、イタズラ書きで、埋めつ！埋まった街！それは果して汚れたきたない街だろうか。

——じ＊えんど——



人民の武器は想像力でなくてなんであろうか

——志麻　薫——

4月25日(火)名古屋高裁金沢支部鳥誠二裁判官係りにおいて審議中であったイタイイタイ病裁判は結審となった。それより前同裁判所同裁判官係りにおいて審議されてきた福井市民の福井工業地帯形成の認可取消処分を求める行政訴訟は却下され、福井市民の敗訴という形をとった。却下理由は公害が出るというのは想像の域を出ないからということである。具体的なもの、それはイタイイタイ病の患者さんのように公害のため病をわずらう人が出てからとでもいうのだろうか。公害を恐れ、自らの生命を守るために反対運動を行ない、訴訟をおこしているというのに。人体に危険があるという一番具体的なもの、それは人間が現に病になるとか、危険な状態になることである。だがそうなったときは遅すぎる、公害が出てからでは遅すぎる。

科学は想像力から生まれた。

まだ、想像の域を出ない、ということの反対のことを「科学的」であるとか、ということを誰っている。自

術科学は想像力から発生し発達してきた。ニュートンはリンゴが落ちる事実から万有引力の法則を発見したもしニュートンがリンゴが落ちるのをただぼんやりと想像力をはたらかさないで見てるだけだったら現代物理学の進歩は何年おくれただろう。今、科学の名により想像力が否定される、それはとりもなおさず科学の名により科学の発生と発展を否定することになる。

今、日本資時代の暴あげ、地域の発展、金沢六十万都市構想という美名を振りかざしてやってくる工場の群れ、それらの工場の誘致に必死な県の偽政者たち、それに対して教与前新産業都市指定、地域発展という美名のもと工場誘致、工業地帯形成を実施した高岡、水俣などの都市では今公害が発生し市民生活がおびやかされている事実をおいてみるとき金沢港工業地帯の未来は一体どのようなものだろうか。

金沢反戦市民 取り扱いパンフレット

☆死の商人に死を

定価八十円

死の商人三菱重工業を告発する資料運動の報告×××……

☆暴力国家と非暴力ヒッピー

覚ゴい刃の非暴力性を積極的に位置づけている××××……

☆中国の旅 ―平頂山事件―

朝日新聞に本多勝一氏が連載された中国の旅を抄録したものです。

☆小説（限定百部）残りもう

天皇裕仁と三島由起夫の幸福な死

ゆずか

（定価二百円）

著 奥月愛

地底のベストセラー

緊急―編集後記―

アッピール

4月28日金沢でおこなわれた「沖縄斗争総決起集会」（主催沖縄ベトナム連帯行動委員会）後のデモ行進の最中に警察、右翼が一体となりデモ行進を行なっている人々に対して暴行を加えた。そのために三名が病院に運ばれ（内一名入院中）多数の人々が顔、手足に傷をうけた。我々はこの警察、右翼の暴行に対し強く抗議する。

今までにも警察は数多くの暴力行為を日本全国ではたらいている。人市民Ｖの見ないような位置で、見えないように行なわれた。そして彼らは人市民Ｖとデモを行う市民学生とを切り離そうとやっきになる。警察宣報車は「人市民Ｖの皆さん、デモに近づくと危険ですから近よらないでください」といった主旨の放送をくり返す。ここには、デモをする人々は市民に非らずという意味が含まれている。だが市民の市民たる由縁は市民の権利を行使することにある。市民が権利の行使を放棄する時権利は権利でなくなり、市民は奴隷となる。デモンストレーションはこうした市民の権利の一環でありその行使もそうである。それは市民が市民であり続ける基盤でもある、が警察権力は不当にもこの基盤を破壊しようとし市民に向って権利の放棄を迫まる。そして今多くの人々が権利を放棄し奴隷になっている。我々は特別なことを行なっているのではない自らが市民であり続けるための権利行使にすぎない。そして市民であり続けるのは一人一人の責任であり又一人一人が自ら行う以外にないのである。

我々は再度抗議する。警察と右翼が一体となった暴力行為に対しそして我々はこのことを決して許さない。なお負傷した人の治療費、抗議行動告訴の費用などいろいろお金がいります。カンパをお願いします。

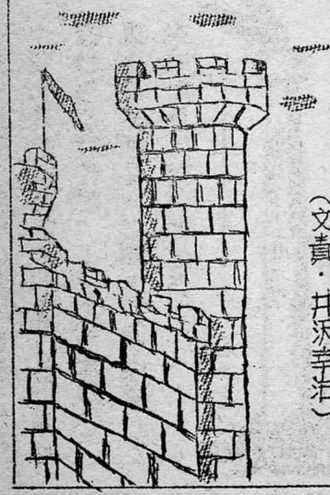
―1ページ目より―

すわけにはいかない。おそらく急ピッチで進められる火事設置ベ資材搬入、パイプライン等々）は人々にあきらめを押しつけるとともにまたあらたな不安をもたらせてることになるだろう。この六つの側面は同時に私達のオニグランドをつくる出発点である。公害の議論とそれがつくり出すキセイ事実に屈服せず、なんとしても「弱いものいじめの公害差別」に異議を申立て次のラウンドに人々のよりどころとなるように運動の継続を表現仕しなければならない。私達は内灘町長の前に座りこみ、町役場、北電の前に座り（こもうとするのはひとつの運動スタイルにすぎない）けれども、直接民主主義を根づかせようとする私達の（こころざしはますここからでもはじめなくてはならないと思う。

土曜日、日曜日あるいは少しでも上マをつくってかわるがわる座りこむ泊まりこみを拒否してあくまで異議を申立てる。このような思想と行為の持続のなかからしか民衆の力は生まれない。労働者も学生も老人も青年もすべてこころざしを立てるものは自己自身に向って、少数者の自己解放の道すじとチだてをひとつひとつはっきりさせて実践しようではないか。すべてを言葉のハンランに解消させることはもうたくさんだ。

（三月二十四日記）

（注）

金沢反戦市民社は、『展望』3月号所収、星野芳郎『新全総の思想』に反対する』をコピーしています。でもあがったらぜひおよみ下さい。小田実『世直しの倫理と論理』―世直しパカ語―岩波新書（上下）、広野広『新島アリの反乱』現代評論社、と合せておよみください。

（文責・井沢幸治）